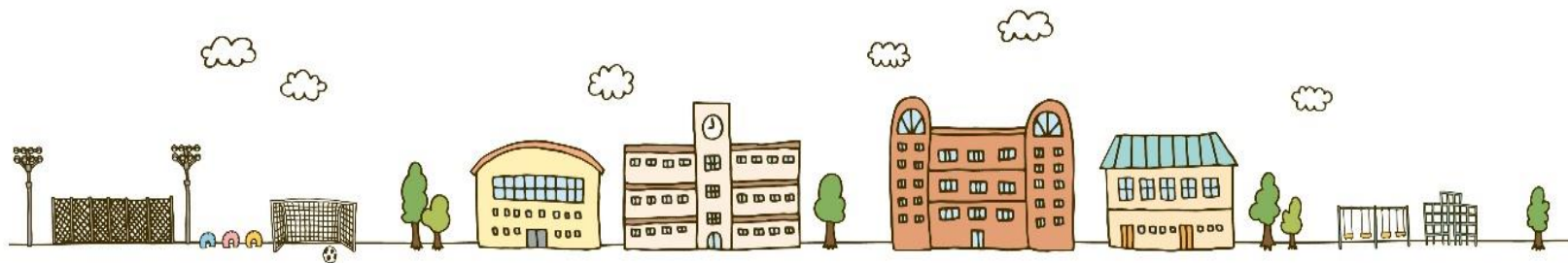




福岡県若年教員研修（養護教諭）3年目 危機発生時における心のケア



窪田由紀
九州産業大学





はじめに

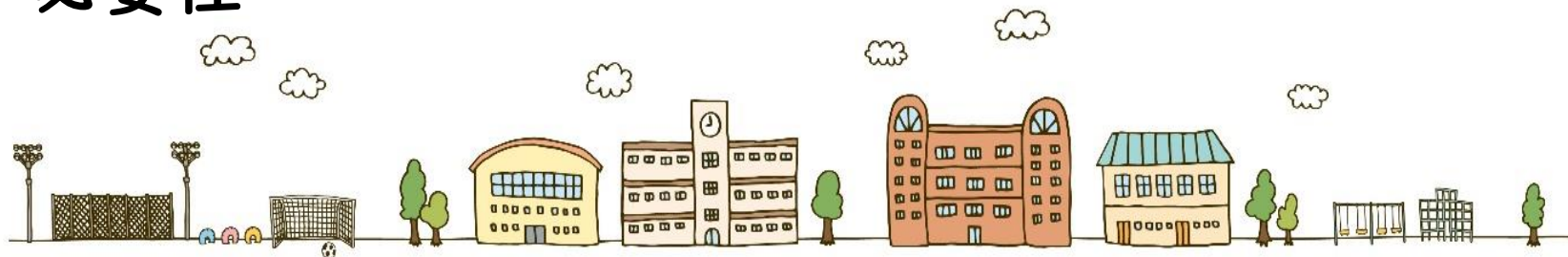


• 本講の概要

- 包括的な学校危機予防・準備・対応・回復モデル 
- 危機発生時の心のケアの理論と実際
- もっとも深刻な危機の一つとしての子どもの自死
- 児童生徒プログラム演習
- 危機発生時の心のケアにおける養護教諭の役割

• 学校危機発生時の心のケア

- 2000年前後から必要性が認識され、実践が蓄積
- 予防から中長期的な対応・検証に至る包括的な取組の必要性

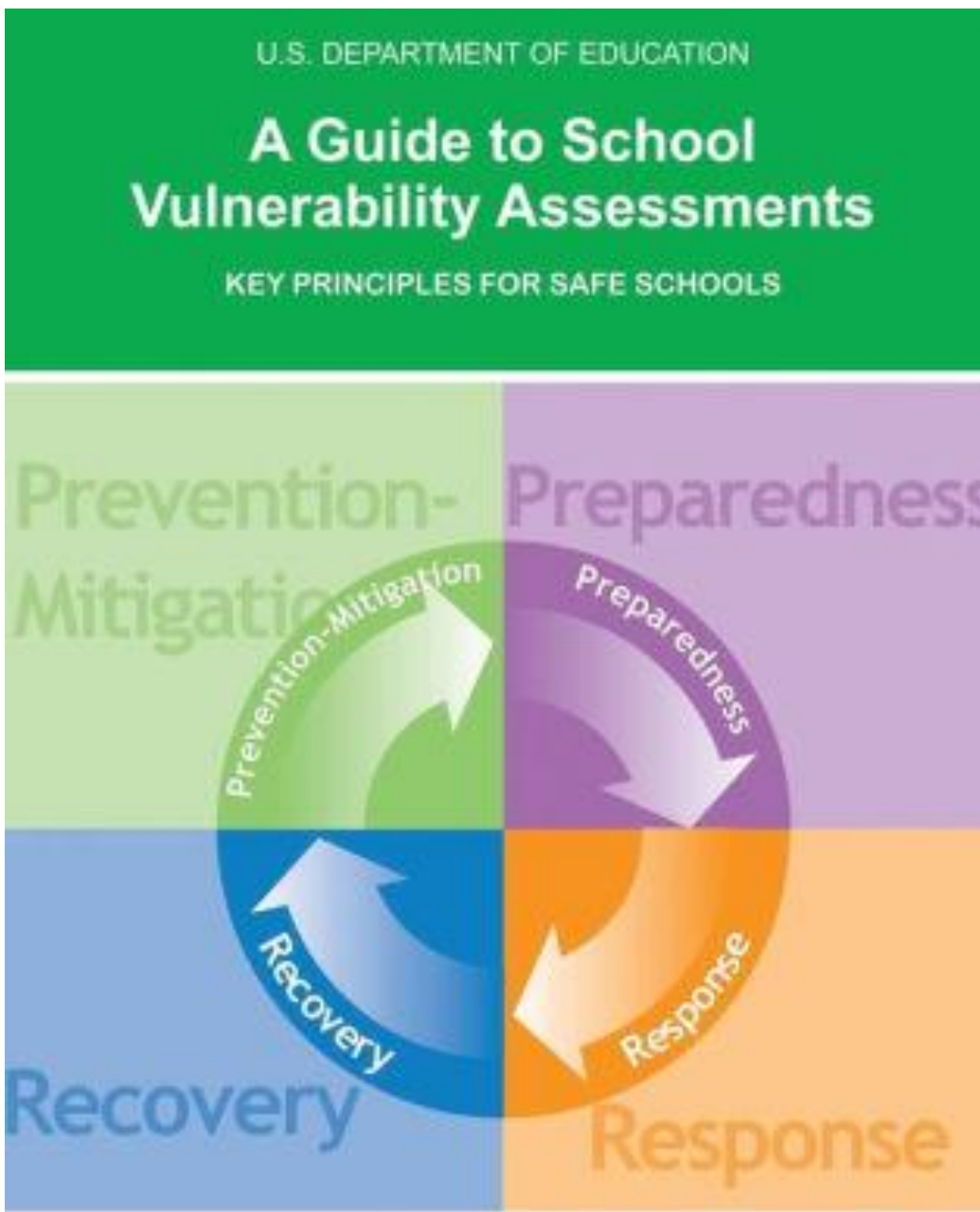




包括的学校危機 予防・準備・対応・回復モデル



包括的学校危機予防・準備・対応・回復モデル



予防・緩和
準備
対応
回復

4段階の循環モデル

U.S. DEPARTMENT OF
EDUCATION 2008 A Guide
to School Vulnerability
Assessments





学校危機への
包括的な取組み

PPRRモデル!

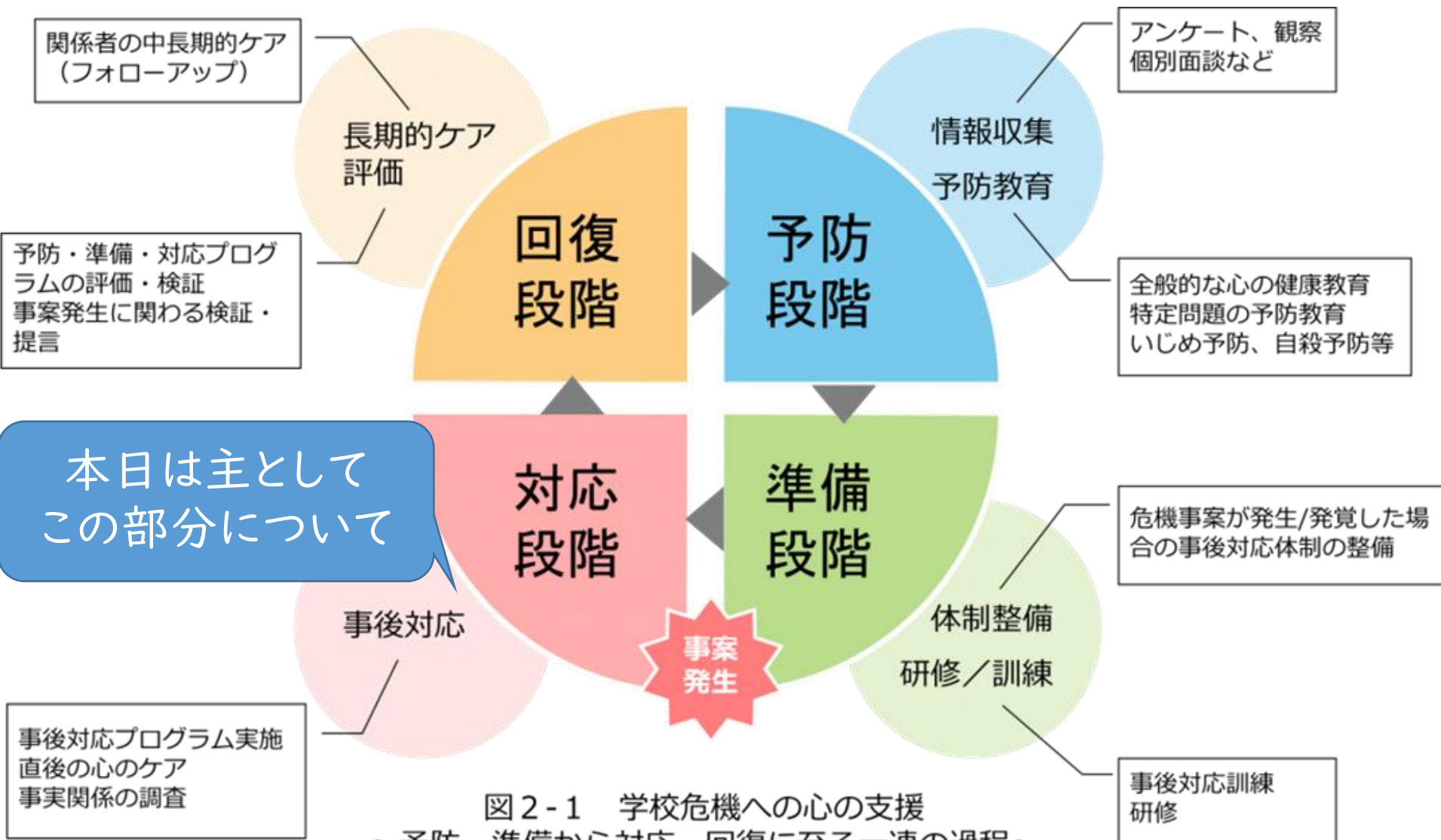
同じくアメリカの学校
危機管理の専門家
の一人の著作でも

Kerr, M. M. (2009)
School Crisis
prevention and
Intervention.
Pearson Education,
Inc., Upper Saddle
River, New Jersey.

Figure 1.1
A Model for School Crisis Prevention and Intervention.

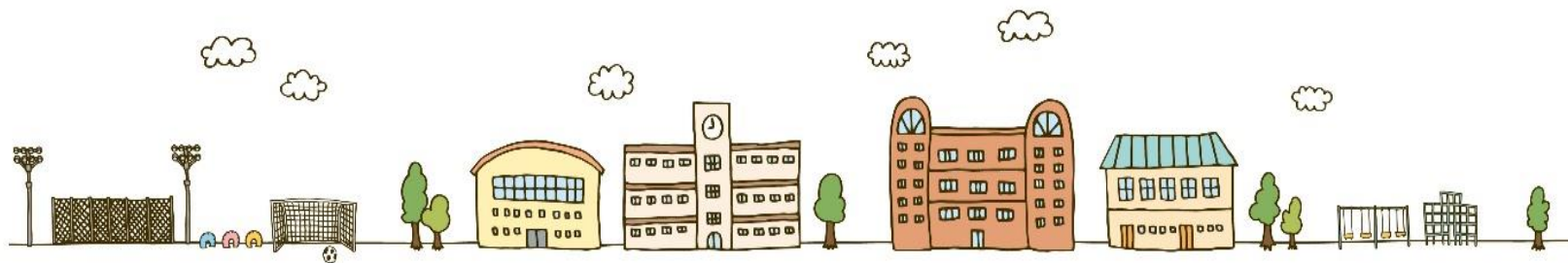
包括的な学校危機予防

学校危機予防・準備・対応・回復モデルから





学校危機時の心のケア 理論と実際



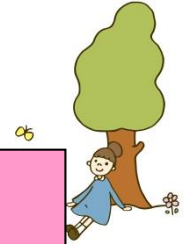
学校危機後の心のケア～基本的な考え方



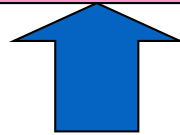
- 学校コミュニティが対象 ←場のケア(藤森、2008)
 - 学校コミュニティ:本来の機能として構成員のケア
 - 学校コミュニティが本来持っている機能の回復を目指す
- 緊急支援
 - 個人の危機への直接的な介入ではなく、学校コミュニティが構成員に対して行う「緊急対応」を後方から支援
- Psychological First Aide(広義)
 - 心理学的応急措置 ⇔トラウマケア



学校コミュニティの危機とは



児童・生徒や学校全体を巻き込む
突発的で衝撃的な出来事
が生じることによって、
学校コミュニティ全体が機能不全に
陥ること

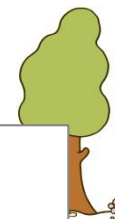


そのきっかけとなる具体的出来事



教師が経験した学校危機

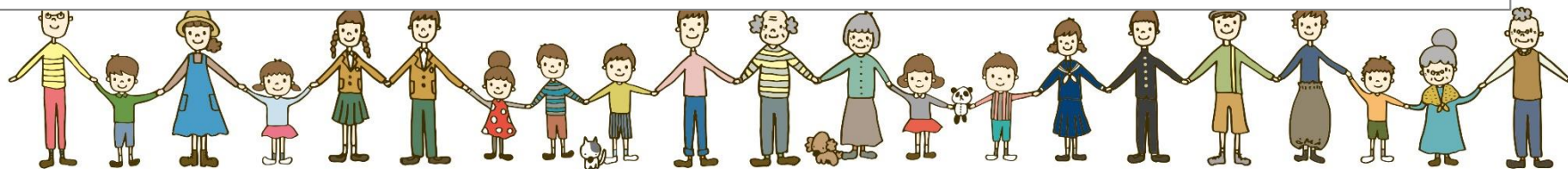
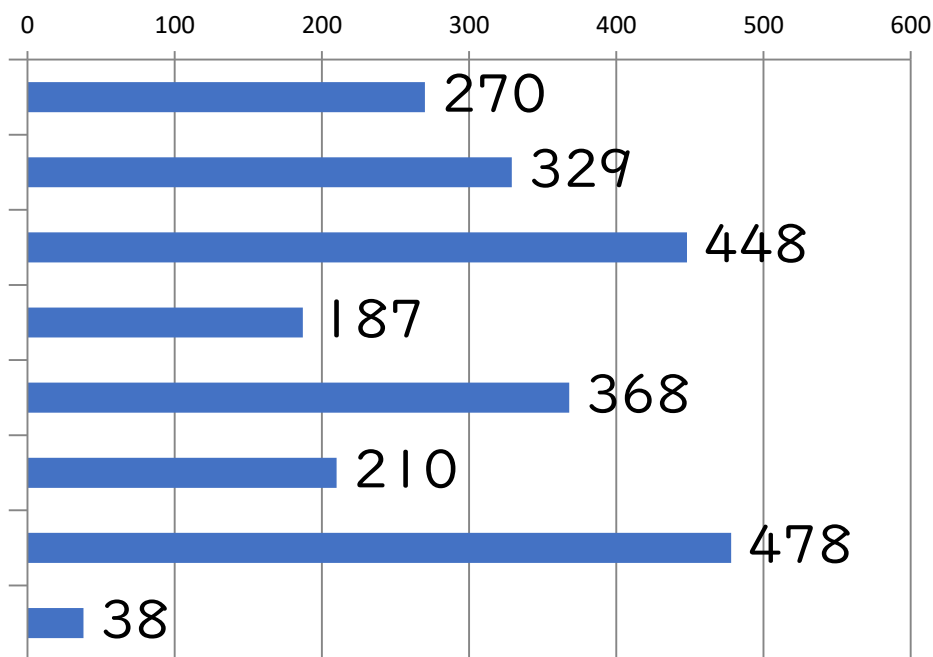
(窪田ら、2016)



学校危機の事案別経験件数

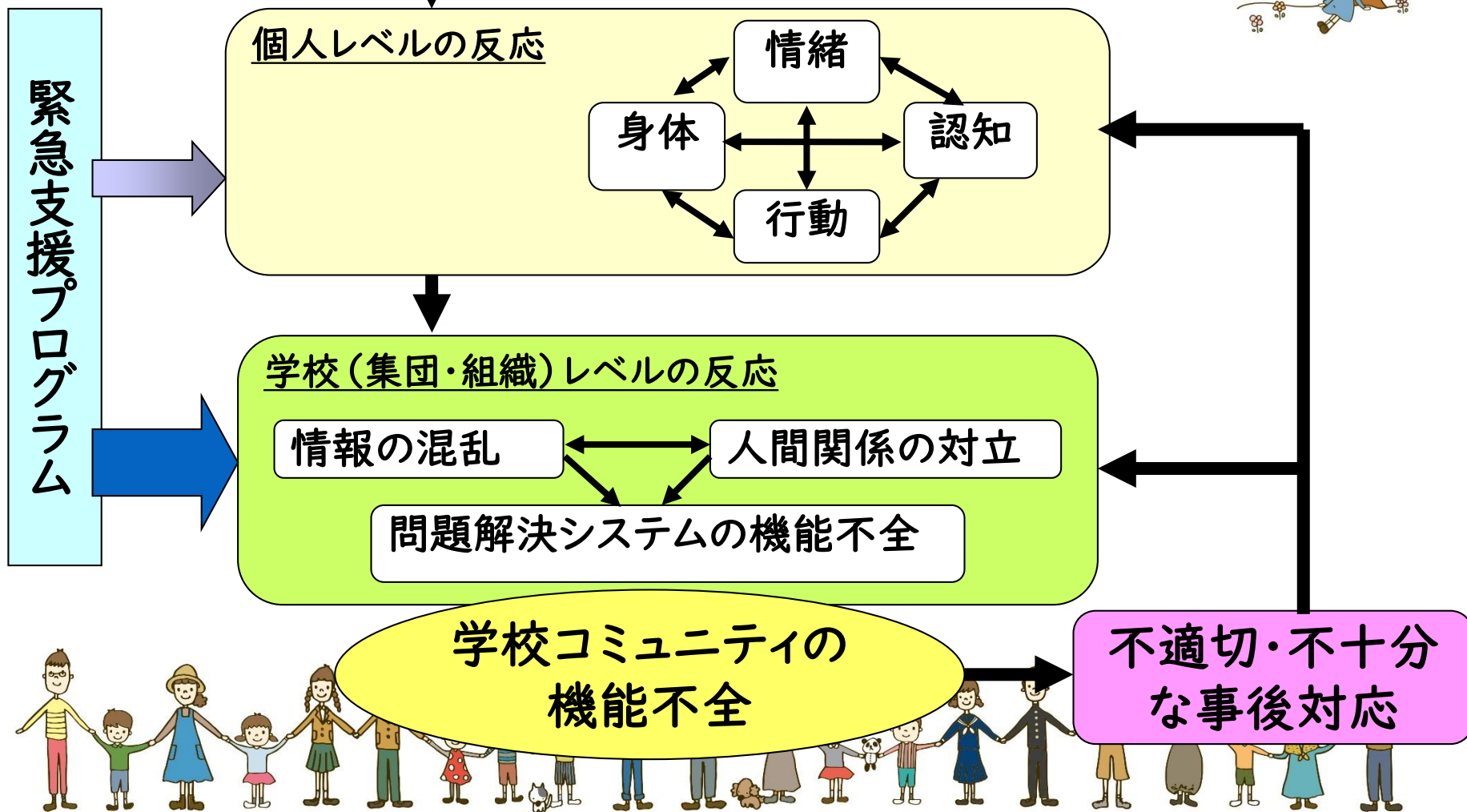
(n=994,複数回答)

児童生徒の自殺・自殺未遂
管理下事故
管理外事故
地域の事件・自然災害
加害事件
教師の突然死
教師の不祥事
その他



学校コミュニティの機能不全

危機的な出来事



早期に 外部からの支援を受けて緊急支援プログラムを実施すること

災害、事件・事故後の緊急支援はなぜ必要か

構成員は危機的な出来事を経験すると身体面・心理面・行動面に渡るさまざまな反応（「異常な」事態に対する「正常な」反応）を起こす

適切な時期に適切な対応を行うことによって大半の健康な人々の反応は収束可能。

適切な対応がなされないとPTSD,うつ状態、種々の問題行動を起こし、生涯にわたる影響が残る。



専門的、継続的なケアを必要とする一部の構成員を
早期に発見し、対処する必要がある

コミュニティの機能不全のため、不適切・不十分な事
後対応がなされる危険性がある

早期に 外部からの支援を受けて
緊急支援プログラムを実施することが必要



事件・事故

学校コミュニティ

児童・生徒

支援レベル

一次
支援者

教職員

保護者

二次
支援者

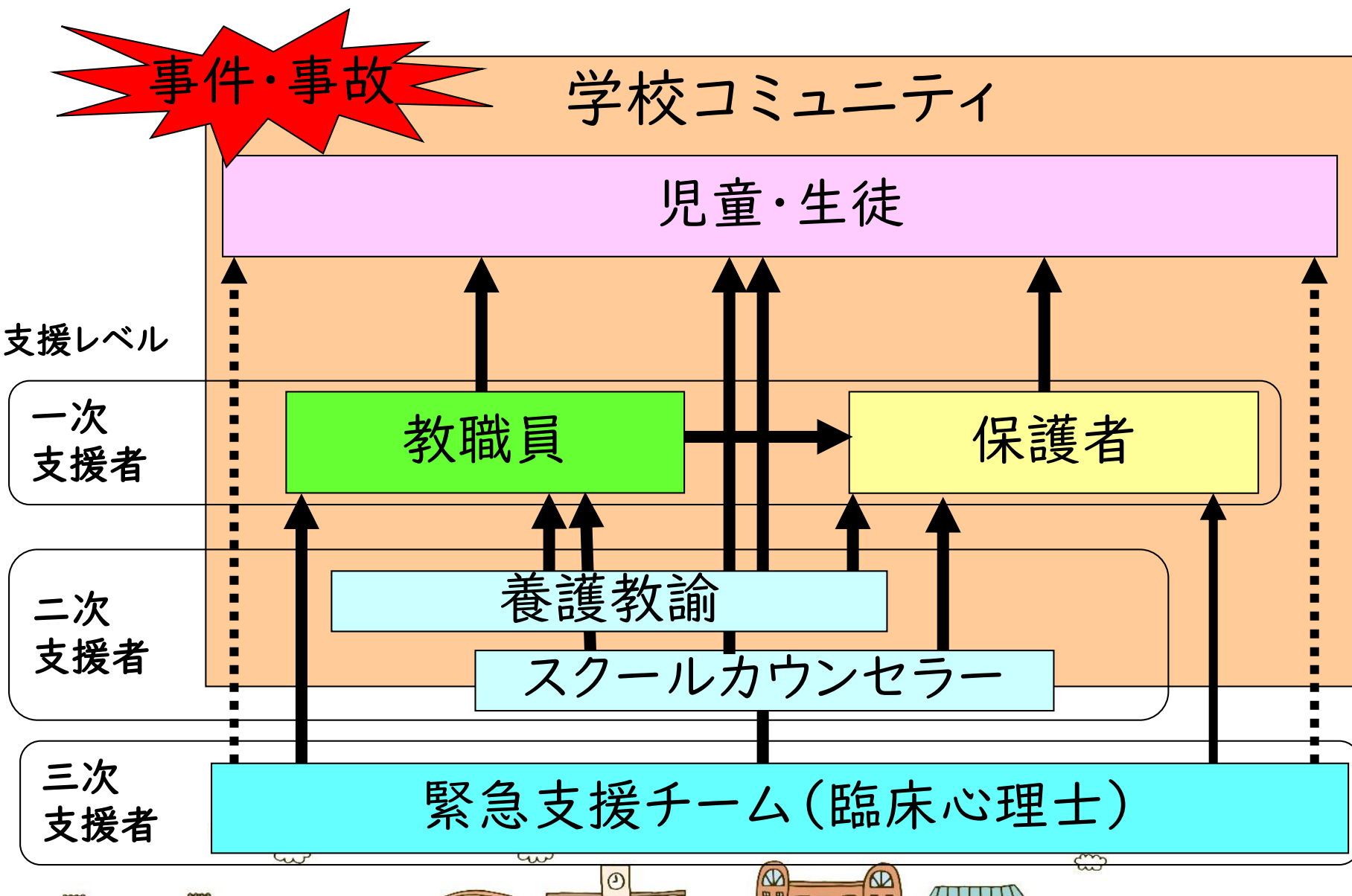
養護教諭

スクールカウンセラー

三次
支援者

緊急支援チーム（臨床心理士）

学校コミュニティの危機への緊急支援モデル



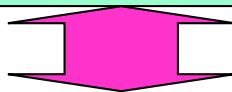
緊急支援プログラムのねらい

Ⅰ こころの傷の応急処置=辛い出来事について話をすること

*無理に押さえ込むとこころの傷が「化膿する」

*多少痛みを伴うが、必要な処置

*ただし、無理に話させることのないように



身体の傷の応急処置=傷口をきれいな水で洗い流すこと

*傷口についたごみを流し、化膿するのを防ぐ

*時には傷が沁みて痛い、必要な処置



緊急支援プログラムのねらい



2 一次被害の二次予防的機能

事件・事故による直接的反応について、
アンケート、面談等によるハイリスク構成員
のスクリーニングと継続的ケアへの繋ぎ

3 二次被害の一次予防的機能

正確な事実の共有、構成員の不安の解消
によって、事件・事故にまつわる噂など
による二次被害を防止



緊急支援プログラムの概要（3本の柱）

*共有する事実の内容・範囲

*一旦決定したら「いつでも、だれでも、どこでも」同じ内容

事件・事故についてのできるだけ正確な情報を共有すること（←当事者や保護者の了解）

危機的な出来事を体験した際のストレス反応とそれに対する対処方法についての情報提供を行うこと

←種々の反応が起こるのは、きわめて正常であることを伝える（異常な事態への正常な反応）

→反応の予測可能性、自己コントロール感

事件・事故についての各自の体験を表現する機会を保障すること（グループ、個別、アンケート）

→安心感の確保、反応抑圧の防止



緊急支援プログラムの流れ

教職員対象

児童・生徒対象

保護者
対象



メンバー全体
を対象

教職員研修

クラス集会

個別面談

特別の配慮を
要する構成員
を対象

カウンセリング

カウンセリング

緊急保護者会

カウンセリング

は原則として学校、教師が行う



児童・生徒対象プログラム

クラス集会（全校集会に続いて）

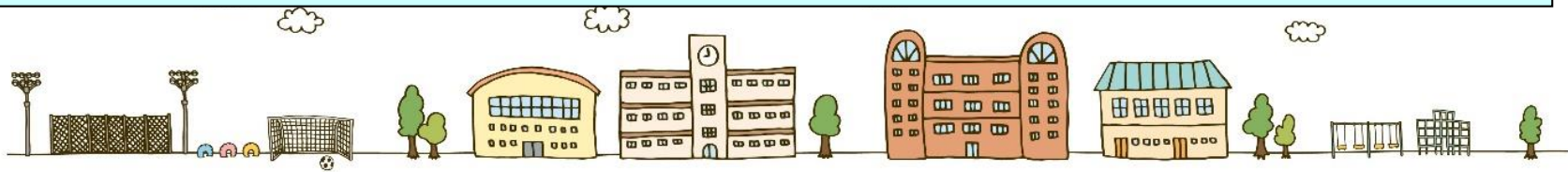
事実報告：事前に文章化。各クラス共通。

こころの健康調査票→面談

さまざまな思いを表現し、受け止めてもらう機会

＊事実の共有：二次被害の予防、大人への信頼感

＊表現機会の保障：安心感



「こころの健康調査票」

こころ、身体、行動面に現れた反応のチェックと自由記述
事実報告に続いてクラス単位で実施



こころの健康調査票の一例（中学生用）

今回、私たちにとって、とても辛いことが起こりました。このことを知ってからのあなたの状態にあてはまる項目に✓をつけてください。

- ☐ このことが頭から離れない
- ☐ このことについての夢をみた
- ☐ このことを忘れてしまいたい

・

こころの健康調査票



(1) 事件・事故に関する直接的な反応
このことが頭から離れない、

(2) 情緒的反応: 不安・緊張・集中困難
眠れない 集中できない イライラする

(3) 否定的認知
自責 不信 孤立

(4) 身体的反応
頭痛 腹痛 食欲不振



特別の配慮を要する構成員

•近接性

- 情緒的近接性:当事者と親しい間柄
- 物理的近接性:現場の目撃、近くにいた
- 時間的近接性:近い過去に外傷体験、喪失体験

•脆弱性

- もともと不安定
- ストレスが多い
- サポートが少ない

***親しい人以外にも多くの人に影響を受ける。**



プログラムの実施例

	教職員	児童・生徒	保護者
1日目	打ち合わせ 緊急職員会議 ストレス研修 カウンセリング		PTA役員打ち 合わせ 保護者会案内
2日目	こころの健康調査票 準備 個別面談の方法研修 コンサルテーション	事実報告 こころの健康調 査票実施 個別面談	緊急保護者会
3日目	コンサルテーション 今後の体制について	個別面談 カウンセリング	継続支援が必要 な児童・生徒

特別の配慮を要する教職員など

アンケート、個別面談結果について

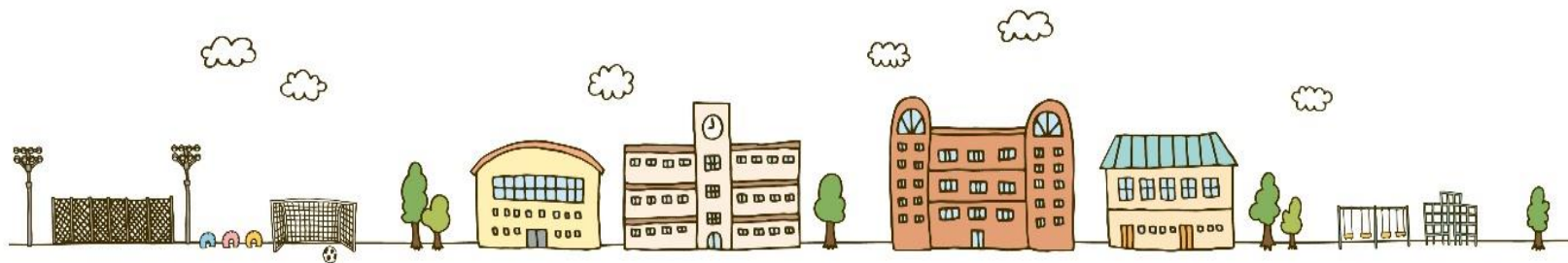


もっとも深刻な危機の一つとしての 子どもの自死



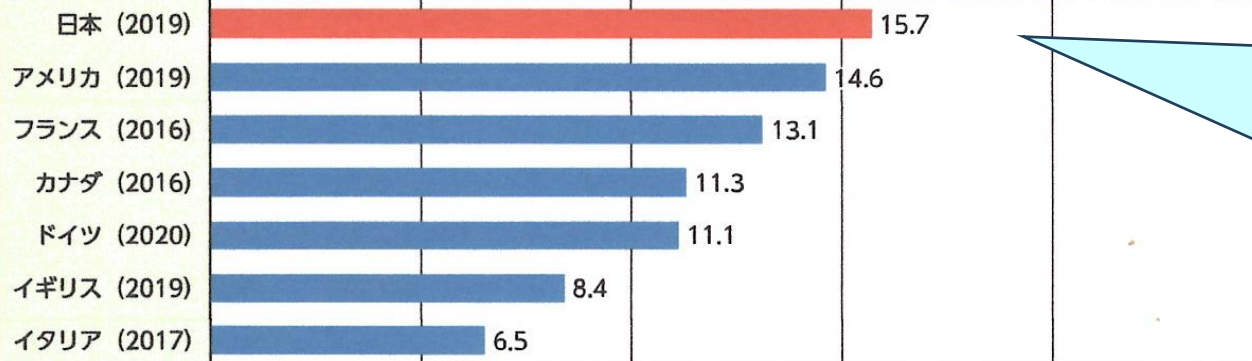


児童生徒の自殺の実態



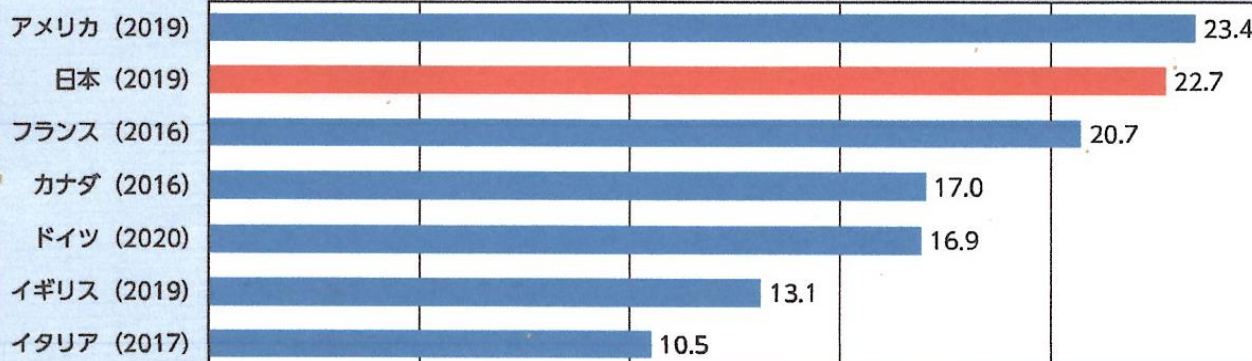
先進7ヶ国の自殺死亡率の比較

総
数

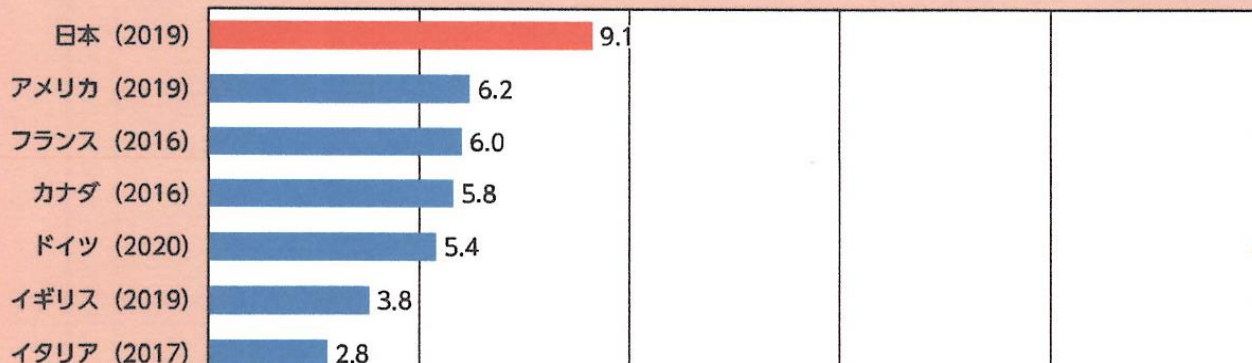


先進7ヶ国中、
最も自殺死亡
率が高い。
男性は2位だ
が、女性は1位！

男
性



女
性

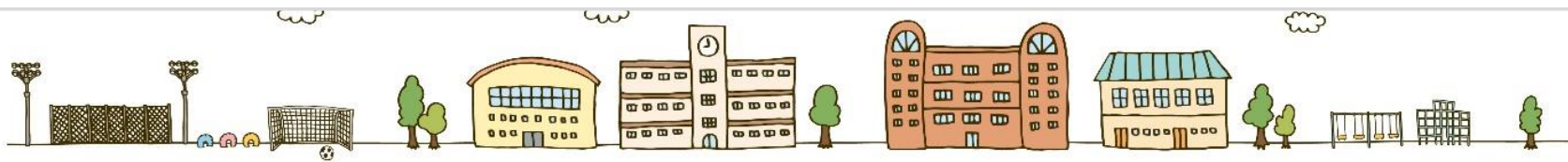
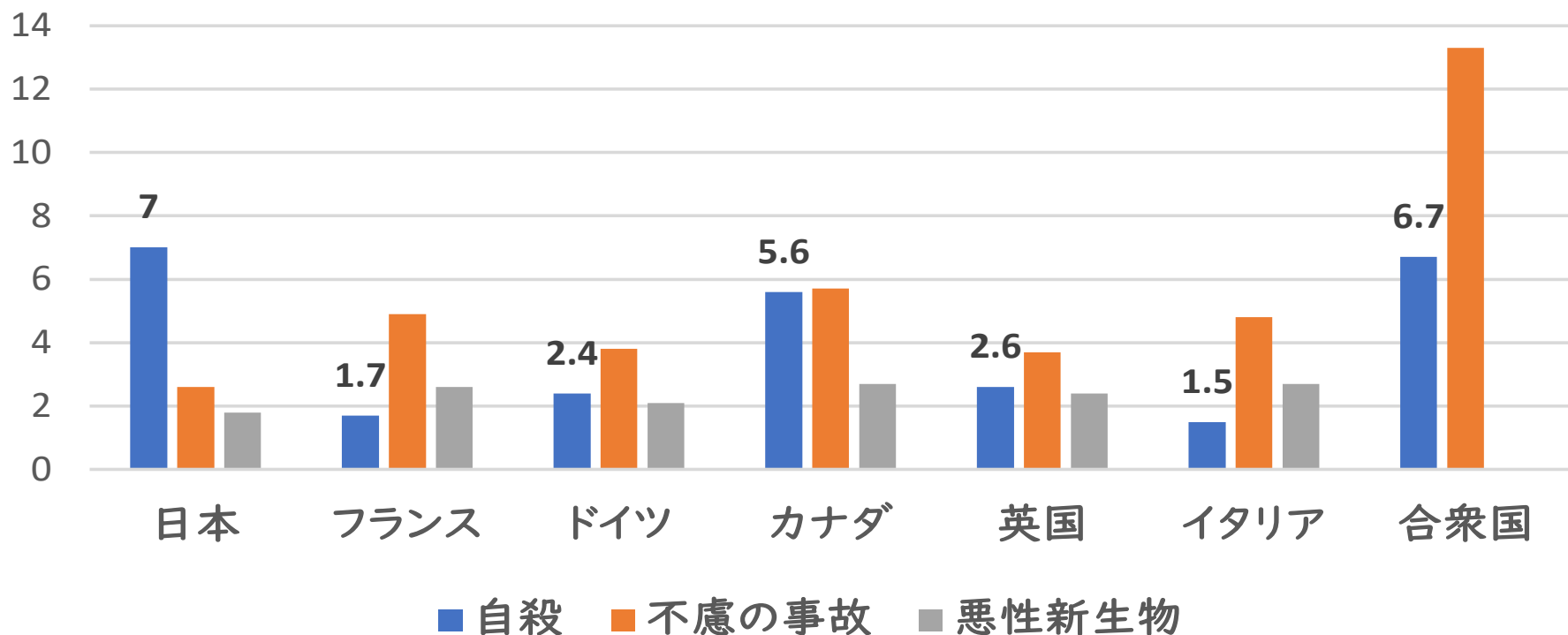


0.0 5.0 10.0 15.0 20.0 25.0



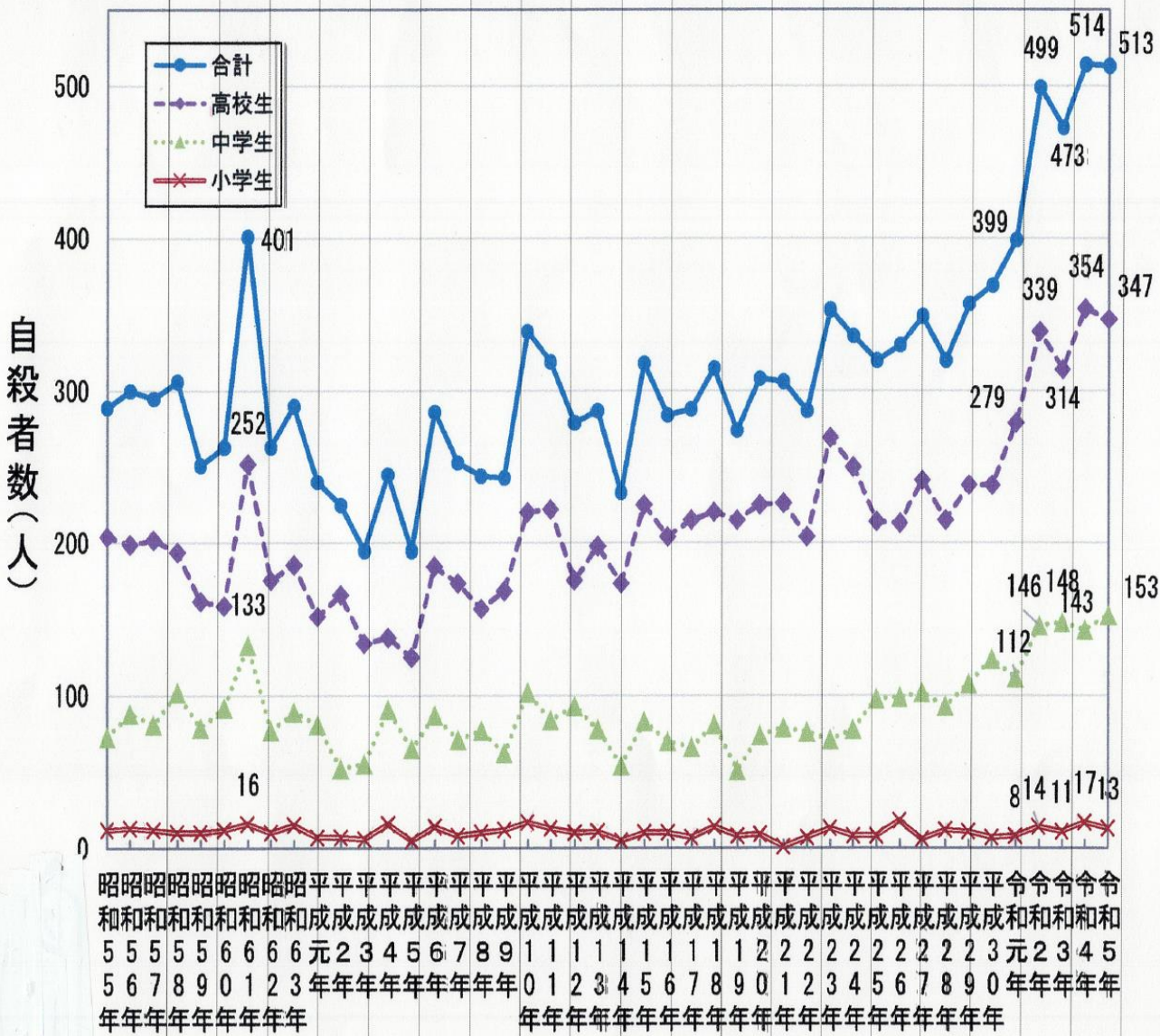
児童生徒の自殺の実態—G7各国との比較

G7各国の10～19歳の死亡率*の比較
(*10万人あたりの死者数)



児童生徒の自殺の実態―小中高校生の自殺者数の年次推移

○令和5年の小中高生の自殺者数は513人であり、前年と比べ1人の減少となった。
○小学生は13人（4人減）、中学生は153人（10人増）、高校生は347人（7人減）であった。



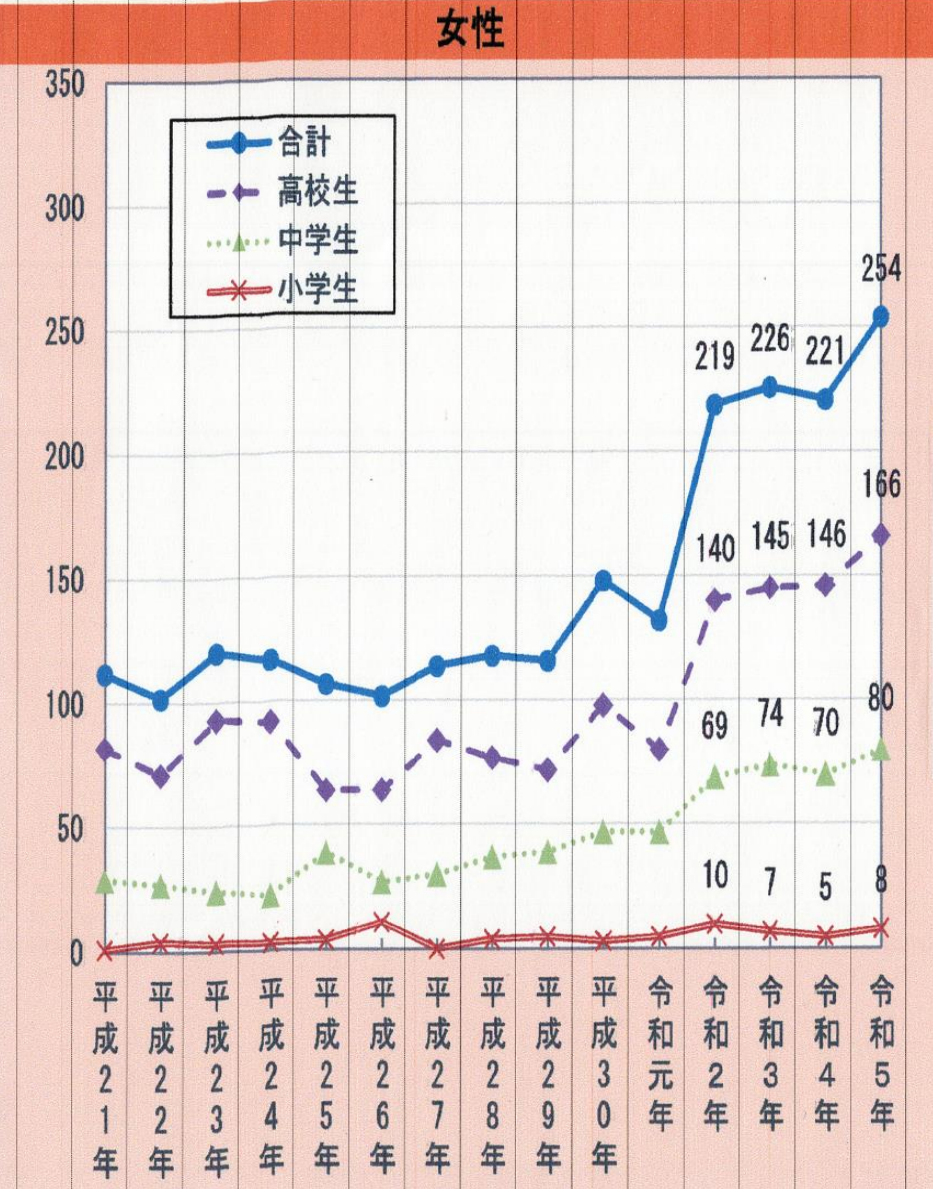
自殺者数の前年差

	令和4年	令和5年	前年差
小中高生	514人	513人	-1
小学生	17人	13人	-4
中学生	143人	153人	10
高校生	354人	347人	-7

資料：警察庁自殺統計原票データより厚生労働省作成

児童生徒の自殺の実態―自殺者数の年次推移（男女別）

○女性は、小学生（3人増）、中学生（10人増）及び高校生（20人増）のいずれも増加した。



資料：警察庁自殺統計原票データより厚生労働省作成

児童生徒の自殺の実態—令和4年、令和5年の原因動機別

令和4年、令和5年の小中高校生の自殺の原因・動機



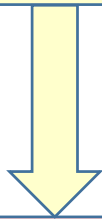
	令和5年	令和4年
学校問題計	261	280
学業不振	65	83
進路に関する悩み	53	60
学友との不和（いじめ以外）	48	49
入試に関する悩み	36	37
いじめ	1	8
教師との人間関係	6	8
性別による差別	1	1
学校問題その他	51	35
家庭問題	116	114
健康問題	147	129
経済・生活問題	5	9
勤務問題	4	1
交際問題	33	30
その他	59	66
不詳	88	91



* 出典「自殺の統計：地域における自殺の基礎資料」を基に作表

* 1人について最大4件までを計上

子どもは、学校、家庭といった生活の場
の中で悩みを抱え、募らせていつている



子どもの日常生活の丁寧な
見守り・気づき・支援

特に中高校生女子では精神疾患
が上位に位置づけられる。



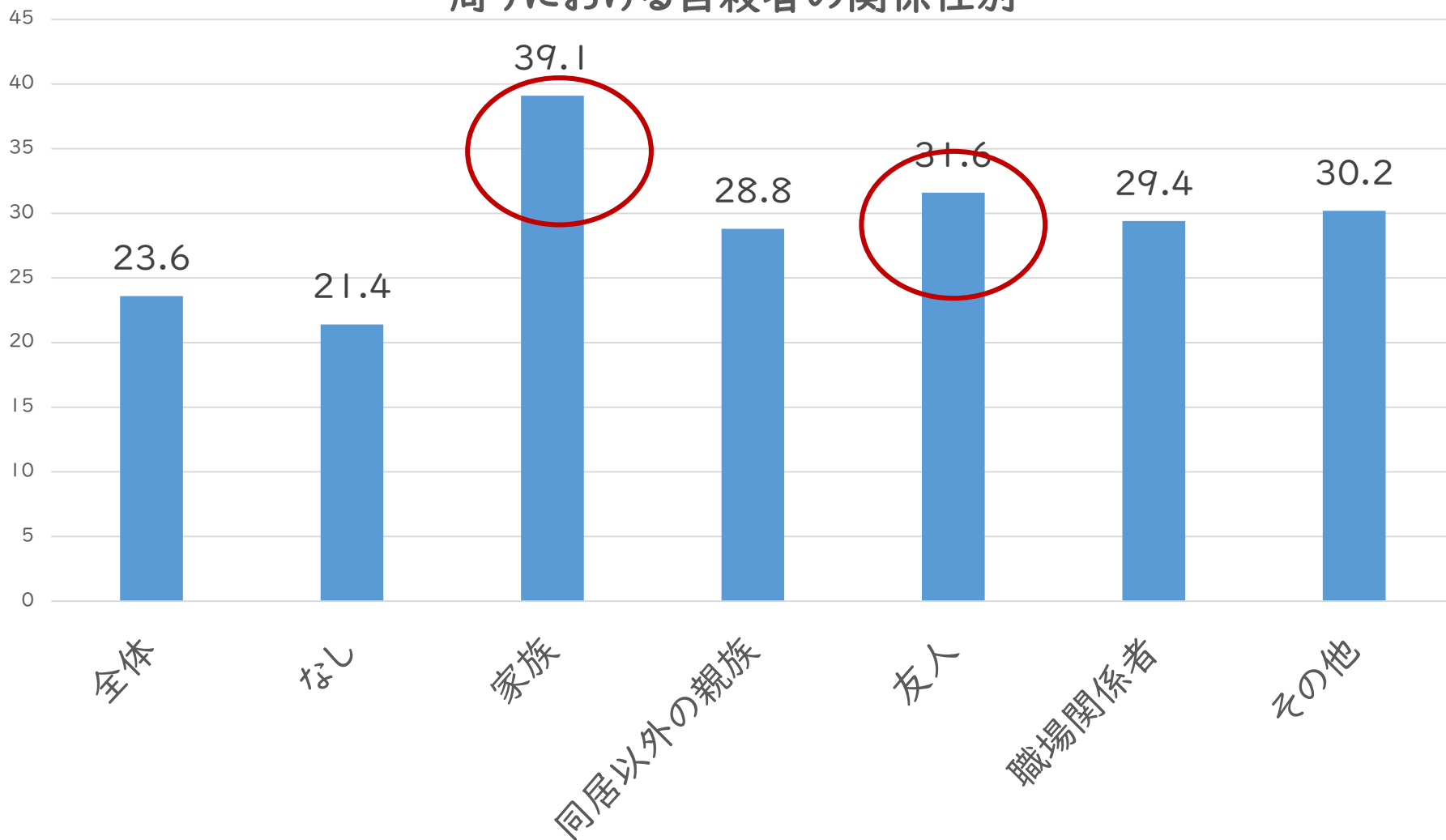
心の健康に関する知
識、対処スキルの育成



学生・生徒の自殺者数の推移



自殺を考えた経験(%)
周りにおける自殺者の関係性別



児童生徒の自殺を巡る状況

- 児童生徒の自殺者数、令和2年に大幅増、その後高止まり、令和4年に過去最高の514名、令和5年513名!
- コロナ禍で女子の増加大(中学生47名→69名、高校生80名→140名)。中高校生女子の自殺の背景、精神疾患が多い。
- R4年には男子高校生が増加、令和5年は全校種で女子が増加。
- Klomek et al (2009):フィンランドにおいて8歳の時点でいじめに関わった子ども(いじめる側、いじめられる側を共に含む)が25歳までに自殺関連行動を起こす割合が有意に高い
- 周囲の人の自死の影響を受けやすい⇒群発、連鎖の危険
⇒学校における自殺予防は喫緊の課題





児童生徒の自死後の対応の留意点



•学校における自殺予防の三段階（高橋,1999）



•Prevention:未然防止

文科省「子供に伝えたい
自殺予防」(2014)

文科省「教師が知っておきたい
子どもの自殺予防」(2009)

•Intervention:進行中の危機への対応

•自殺の危険の早期発見とリスクの軽減、自殺
未遂後の対応

各地で学校・教育委員会の要請を受けて、臨床心理士会(SC)の派遣等による事後対応の取組

•Postvention:事後対応

自殺発生後の周囲の人々へのこころのケア



文科省「子どもの自殺が起きたときの
緊急対応の手引(2010)

8.3 自殺予防に関する生徒指導の重層的支援構造

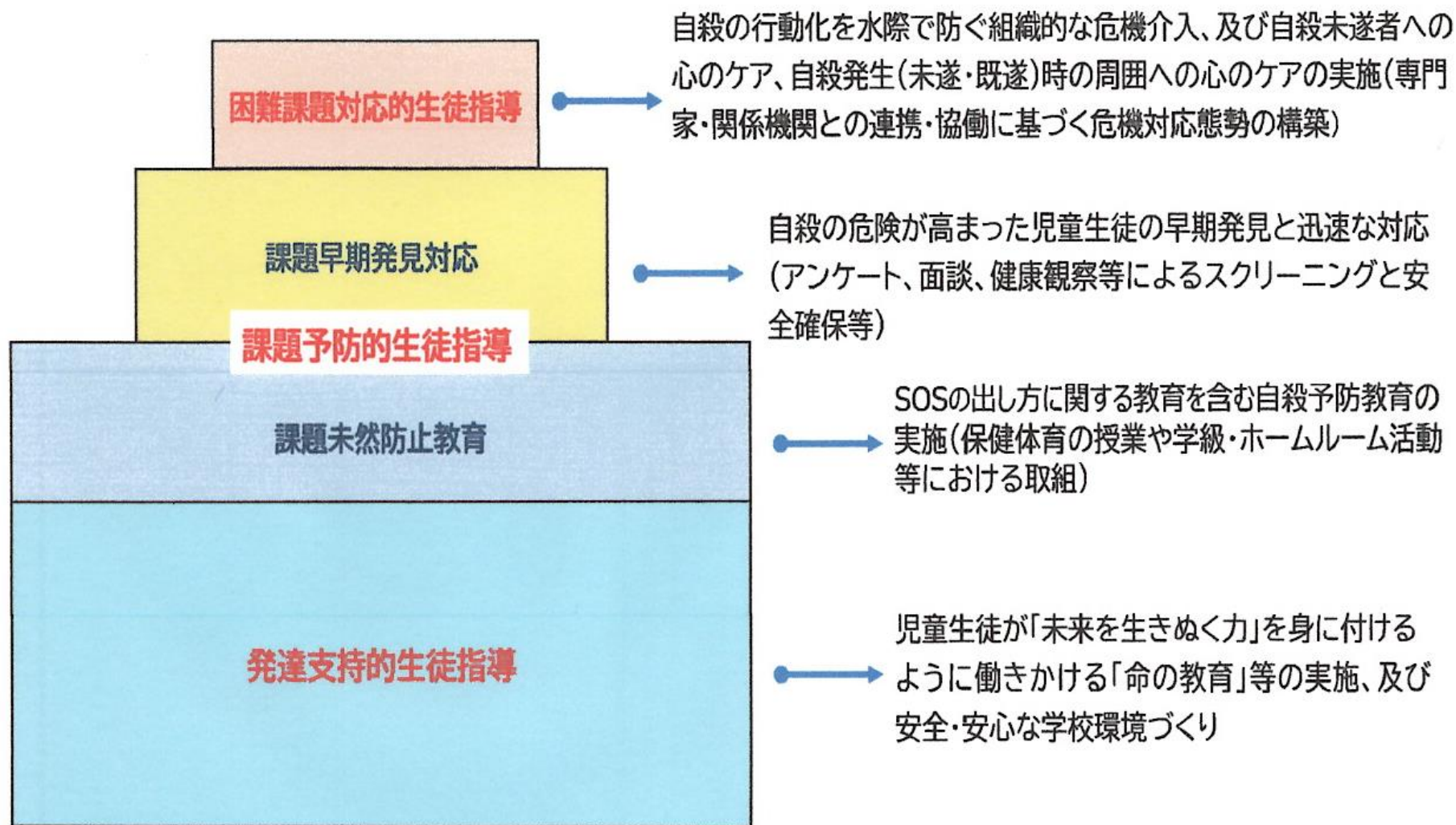


図 14 自殺予防に関する重層的支援構造

危機発生時の教師や学校の様子 ～事案ごとの比較～



表3 事案による教師の反応, 学校全体の様子の比較

		児童生徒の 自殺	児童生徒の 事故被害	教師の突然死・ 不祥事
教師の 反応	呆然自失	大		大
	自責感	大		大
学校 全体の 様子	構成員の混乱			大
	学校への非難	大		大
	情報の隠蔽		小	

樋渡ら(2016)より



大
↑

養護教諭

動揺が最も大きく、消極的
受容や否認など問題に向
き合えない消極的対処。

当該学年

動揺は大きいが、当事者意
識を持ち問題に向き合っ
て対処。同僚の支えも機能？

直
後
の
動
揺

動揺は比較的小さい
が、否認など消極的対
処。
(←情報の少なさ?)

その他の教員

管理職に準じ、動揺は比較的小
さく、積極的な対処(問題からの
逃避が少ない)

生徒指導他

動揺が小さく、事態に
積極的に対処

管理職

↓
小

消極的←

教師の対処法

→積極的

直後の動揺と対処法による各立場の教師のイメージ図(樋渡ら, 2019)

特別の配慮を要する構成員

•近接性

- 情緒的近接性:当事者と親しい間柄
- 物理的近接性:現場の目撃、近くにいた
- 時間的近接性:近い過去に外傷体験、喪失体験

•脆弱性

- もともと不安定
- ストレスが多い
- サポートが少ない

***親しい人以外にも多くの人に影響を受ける。**



事後対応（自殺が起きた場合の緊急対応）



•原因究明・再発防止

↳子供の自殺が起きたときの背景調査の指針

↳いじめ防止対策推進法

•構成員の心のケア

↳子供の自殺が起きたときの緊急対応の手引き

*異なった機能→役割分担

*同時並行的・一体的な運用



予防プログラム としての 事後の心のケア

事件・事故への
遭遇による
心理的損傷を
最小限に
とどめる
予防活動

指示的予防

何らかの不適応の兆候が
表れている構成員対象の
プログラム

実際には、指示的予防、選択的予防プログラムの実施に留まっているケースが多い？

選択的予防

不適応に陥る可能性の高いグループ（当該学級、学年、同部活等の児童生徒）対象のプログラム

全体的予防プログラムを行うことで、コミュニティの回復を支援

全体的予防

すべての構成員を対象としたプログラム
（事実の共有、心理教育、表現の機会の保障）

緊急支援プログラムの概要（3本の柱）

- *共有する事実の内容・範囲
- *一旦決定したら「いつでも、だれでも、どこでも」同じ内容

事件・事故についてのできるだけ正確な情報を共有すること
（←当事者や保護者の了解）

- *ご遺族が自死であることの公表を希望しない場合
 - ・ご遺族の意向を最優先
 - ・あくまでも事実を伝える公表可能な事実のみを伝える（嘘はNG 転校したと伝えてしまったケース）
 - ・子どもの質問に丁寧に対応し、教師は身近な対象の突然の死に直面した子どもたちの「なぜ」「なんで」というわからなさを共に抱える

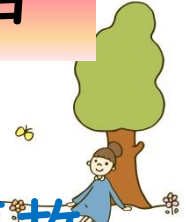




児童生徒プログラム演習



危機に遭遇した生徒への対応演習



- 危機に遭遇した生徒の対応演習(説明)
～中学2年1組の男子生徒「しんりたろうくん」が交通事故死した事例について、隣のクラスの生徒役と担任役のロールプレイ～
- まず全員が生徒役として、
 - 2年2組の生徒として役作り(しんり君との関係など)
 - クラスで担任(この場合は講師)から報告を聞く
 - このことを知った今の身体、心の状態をアンケートに記入する
- 2人組になり、1人が生徒、1人が担任役(交代)
 - アンケートに基づいて話を聴く



しんり君は、明るくて友人も多く、部活動(バスケ)も一生懸命やっていた。当日も普通に練習に参加していた。

話したことはない
顔も知らない などなど

・担任(ここでは講師)からの説明

さきほど校長先生からお話しがあったように、昨夜9時頃、隣のクラス、2年1組の心理太郎君のご家族から太郎君が交通事故にあい、病院で亡くなったとの連絡がありました。

先生も大変驚いています。昨日も授業で顔を見たところだったのでとても信じられません。

皆さんも、今回の出来事を知ってから、いろいろなことを感じていると思います。このようなことが身近に起こると、不安な気持ちになったり身体の調子が悪くなったりするのはごく当たり前のことで、おかしいことではありません。

これから、アンケートを配りますので、今のところや身体の状態についてあてはまるところに印をつけ、今の気持ちを書いて下さい。



・アンケート(心の健康調査票)の記入

・先ほど設定した生徒としてアンケートに記入

・チェック項目と今の気持ちの記入



こころの健康調査票

今回、私たちにとって、とても辛いできごとが起こりました。このことを知ってからのあなたの状態にあてはまる項目の□に をつけてください。

- ☐ このことが頭から離れない。
- ☐ このことについての夢をみた。
- ☐ このことを早く忘れてしまいたい。
- ☐ よく眠れない。
- ☐ なかなか集中できない。
- ☐ 怒りっぽくなっている。
- ☐ いらいらする。
- ☐ 日常生活をするのがやっとなのである。
- ☐ ときどき無感覚（何も感じない状態）になる。
- ☐ 緊張していて、神経質になっている。
- ☐ 気持ちが落ち込む。
- ☐ 物音などに対して敏感になっている（ちょっとした音にも驚く）。
- ☐ 人に自分の気持ちがわかってもらえない感じがする。
- ☐ 自分を責めてしまう。
- ☐ 人が信じられない。



- 担任による個別面談

- 一人ずつ、5分～7分程度の面談

- 記入済みのアンケートを見ながら、生徒の反応をありのままに受け止める
 - 「食欲がないんだね」「このことが頭から離れないんだね」「イライラしているんだね」
- これからもいつでも話を聴けることを伝える
 - * 「大丈夫」、もしくは「話したくない」という生徒は、無理に話させようとせず、「何かあったら言ってね」



- ロールプレイの実施
 - 一方が生徒役、他方は担任役
 - 5～7分程度。きりのいいところで交代
 - まず、生徒役、担任役から下りる
 - 改めて担任役、生徒役になる
 - 新しい役割でロールプレイ
 - 5～7分で終了



- 振り返り

- ペアでの振り返り
 - 生徒役、担任役をやってみて感じたこと
- 全体でのシェアリング・質疑





危機後の心のケアにおける 養護教諭の役割



危機後の心のケアにおける養護教諭の役割



- 児童・生徒のケアの第一次的な担い手は担任教師と保護者

- 養護教諭は二次的な支援者として、
 - 必要に応じてスクールカウンセラー等と連携して担任や保護者をバックアップ
 - 特別な配慮を必要とする児童生徒のケア
 - 必要に応じて外部の専門機関と連携

＊基本的には、日常業務と同じ



各段階における養護教諭の役割

・通常時:

- ・特別の配慮を要する児童生徒の把握
- ・心身のケアについての校内での合意形成
- ・関係機関との連携

・危機発生時（必要に応じて）

- ・応急措置
- ・医療機関への搬送

・事後ケア：直後から1週間程度

- ・身体的症状を訴える児童生徒への対応
- ・専門的・継続的ケアが必要な児童生徒のピックアップ
← 日頃の適応状態、危機事案との関わり



各段階における養護教諭の役割

・危機発生から1ヶ月程度:

- ・特別の配慮を要する児童・生徒の継続的ケア
←見守りと必要に応じて専門機関への紹介
- ・スクールカウンセラー等と連携しながら、担任、保護者などのバックアップ
- ・教職員の健康状態への配慮
- ・身体的訴えで訪室する児童・生徒のケア
←事件・事故との影響への配慮

・1ヶ月以降～

- ・特別の配慮を要する児童・生徒の継続的ケア（卒業まで）
- ・特別の配慮を要する教職員のケア



各段階における養護教諭の役割

まずは
ご自分自身の
心身の健康!

こころのケア・プログラムについての知識と技能
同職種間のネットワーク
自身のストレス・マネジメント



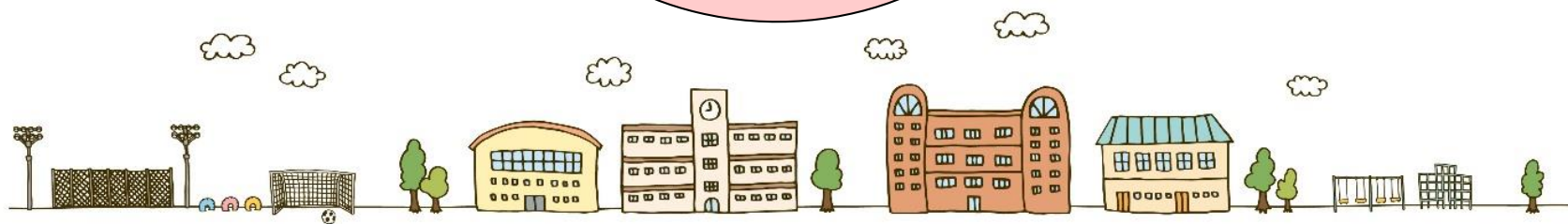
養護教諭への支援

動揺の大きい児童生徒への対応

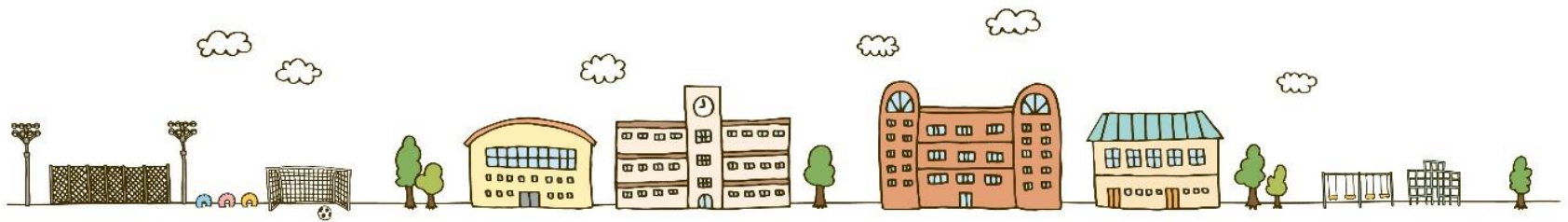
二次受傷への配慮

事後対応で重要な役割を担う割に
情報から疎外

校内緊急支援チーム内への位
置づけの明確化を



備えあれば憂いは、、



2005年4月
手引きを改訂し、
理論編を加えて
書籍化

アンケート、配布資料等は
ホームページからDL可能。

2017年11月
第2版 発行！
2020年中に
第3版 出版



福岡県臨床心理士会：編
窪田由紀：編著

学校 コミュニティへの 緊急支援の 手引き 第3版



災害、事件・事故、そして
感染症の世界的な大流行に
遭遇し、危機状態に陥った学校。
そのとき支援はどうあるべきか。
確かな理論と多様な事例から、
緊急対応を可能にする方法と実践を紹介。

新型

コロナウイルスの大流行に際し展開された
学校コミュニティへの支援、今後必要となる支援を収載の第3版！



金剛出版

緊急対応を可能にする方法と実践を紹介！



- 福岡県臨床心理士会編・窪田由紀編著 2020 学校コミュニティへの緊急支援の手引き 第3版 金剛出版
- 学校コミュニティ危機への心の支援 <http://kinkyusien.info/>
- 文部科学省 2022 生徒指導提要
- Kerr,M,M. 2009 School Crisis prevention and Intervention.
Pearson Education,Inc.,Upper Saddle River,New Jersey.

